

都市祭礼の変容にみる地域社会
— 砺波市出町子供歌舞伎曳山を事例に —

12010073 佐藤 瞳

はじめに

問題の所在

- ・ 祭礼は伝統や慣習が重んじられ、その不変的側面が重要視される(渡辺 1998)
- ・ 都心部への人口流出や少子高齢化などによって、伝統行事や地域活動の担い手が不足
→ **都市部で行われる都市祭礼は変容を余儀なくされている**
- ・ 祭礼は地域文化の礎であり、地域コミュニティの維持・安定化に必要である(喜多 2018)

都市祭礼の変容の既存研究

- 祭祀組織を地域特性で分け、地域社会の差異と重層性を議論(有末 1983)
→氏子地域の人口減少によって町外出身者でも祭祀組織に入れるようになり、祭祀組織の地縁性が変化
祭礼の変容は伝統の解体ではなく、祭礼を維持するために必要なもの
 - 町会を単位に都市部のコミュニティの変容を検討(平 1990)
→人口減少によって祭礼をはじめとした町会行事の縮小や簡素化が進行
 - 過疎地域を対象に祭礼の存続形態を考察(卯田ほか 2015)
→担い手が減少した祭礼にイベントを加えることで祭礼を存続
- 人口減少や少子高齢化などによって
都市のコミュニティが変容し、それに伴って祭礼も変容

都市祭礼を地域住民の意識から 検討した既存研究

都市祭礼が地域住民の意識や心理とどのように結びついて機能するのかという社会的機能の問題を明らかにする必要がある(有末 1983)

- ・祭礼の変容と地域社会の関わりを住民の意識や態度から議論(申 2009)
→祭礼に行政が介入するようになったことで、地域住民たちに祭礼に参加する意識が芽生えた一方で、祭礼を観光商品化しようとする行政に、地域住民たちは不満を持つようになった

→申(2009)は行政主導の祭礼を事例としているが、
日本に現存する都市祭礼の多くは**住民主導**である

住民主導の祭礼を地域住民の意識や態度から捉えることで
現代の日本の都市祭礼が、地域社会においてどのような意義を
持つのかを明らかにすることができる

地域社会と縁故

都市祭礼が地域社会においてどのような意義を持つのかを検討

→地域社会は血縁・地縁関係によって構成されるのが基本

→地域文化の礎となる祭礼も、**血縁や地縁**による関係性に基づいて
執行されるため、**縁故**が祭礼に与える影響を無視できない

上野(1984)

- ・血縁や地縁が衰退し、個人によって**選択される縁(選択縁)**が出現
- ・近代化以降、閉鎖的で排他的な地縁関係を結ぶ必要がなくなり、
地縁による共同体に参加するかを個人で選べるように変化

→**地縁の選択縁化**

研究目的と調査方法

研究目的

砺波市の出町子供歌舞伎曳山を対象に、都市祭礼の変容を地域住民の祭礼への意識や態度、縁故といった観点から検討することで、現代の都市祭礼と地域社会の関係性を明らかにする。

地域住民

祭礼が行われる出町地区の居住者及び出身者を指す

調査方法

- ・ 砺波子供歌舞伎曳山振興会に所属する3名
(西町、中町、東の曳山会にそれぞれ所属)に聞き取り調査
- ・ 曳山振興会の理事会への立ち会い

砺波市出町地区

- 砺波市の中心市街地
- 人口は9,073人(2023年1月1日時点)
- 出町子供歌舞伎曳山の他にも
となみ夜高まつりが実施される
- 出町地区全体の人口は微増傾向
- その一方、出町の中でも
**子供歌舞伎が行われる地域の
人口は減少**している

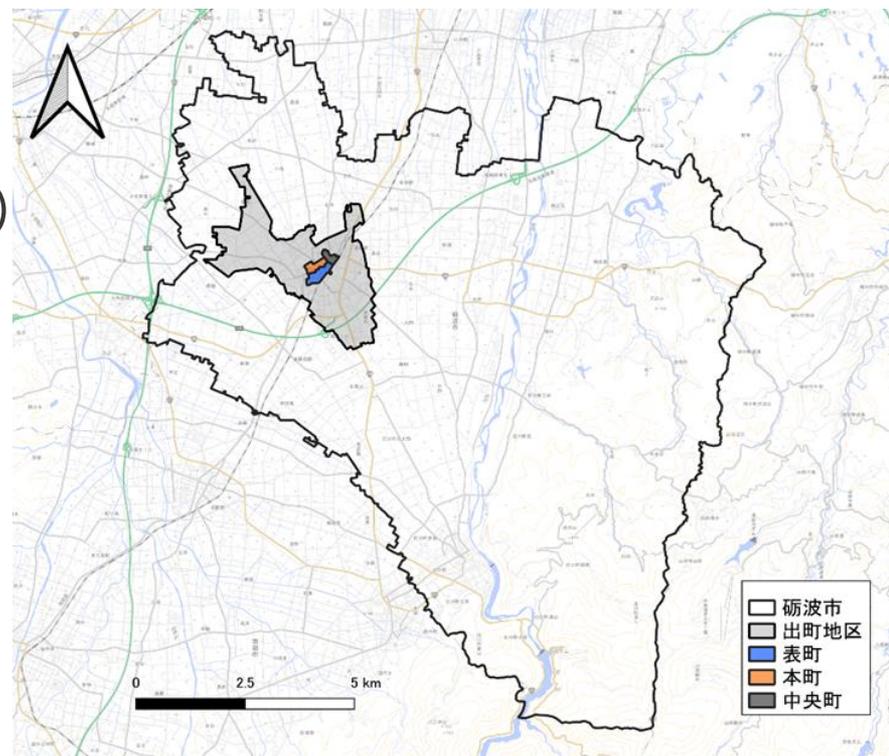


図1 砺波市出町地区
(角川日本地名大辞典、国勢調査により作成).

砺波市出町地区

表1 本町、表町、中央町の人口

| | 年 | 総人口(人) | 0~14歳(人) | 65歳~(人) | 年少者の割合(%) | 高齢者の割合(%) |
|-----|------|--------|----------|---------|-----------|-----------|
| 本町 | 2005 | 471 | 41 | 153 | 8.7 | 32.5 |
| | 2010 | 450 | 41 | 168 | 9.1 | 37.3 |
| | 2015 | 406 | 30 | 162 | 7.4 | 39.9 |
| | 2020 | 367 | 25 | 158 | 6.8 | 43.1 |
| 表町 | 2005 | 441 | 42 | 129 | 9.5 | 29.3 |
| | 2010 | 477 | 43 | 153 | 9.0 | 32.1 |
| | 2015 | 431 | 39 | 161 | 9.0 | 37.4 |
| | 2020 | 392 | 28 | 163 | 7.1 | 41.6 |
| 中央町 | 2005 | 463 | 36 | 147 | 7.8 | 31.7 |
| | 2010 | 355 | 31 | 144 | 8.7 | 40.6 |
| | 2015 | 188 | 10 | 78 | 5.3 | 41.5 |
| | 2020 | 180 | 12 | 74 | 6.7 | 41.1 |

0~14歳を年少者、65歳以上を高齢者とした。(国勢調査により作成).

- 子供歌舞伎曳山が行われる本町、表町、中央町では人口減少だけでなく**少子高齢化も進行**している

出町子供歌舞伎曳山とは？

- 出町神明宮の春季祭礼で、4月29日と30日に行われる
- 曳山の上で小学生が歌舞伎を演じることが特徴
- 当番町制が導入されており、西町、中町、東のうちの1町が上演を行う
(三町揃い曳きのため3基並んでいる→)



図2 子供歌舞伎の様子
(2023年4月筆者撮影).

祭礼の運営方法

- 当番年に当たっている
曳山会(当番町)が祭礼を運営



曳山を所有する町
(西町・中町・東町)
+
協力町
(中町：南町、
東：新町・川原町・木舟町)

- 西町曳山会は特定の協力町を持たないが、人手が足りない場合は近隣町に協力を要請

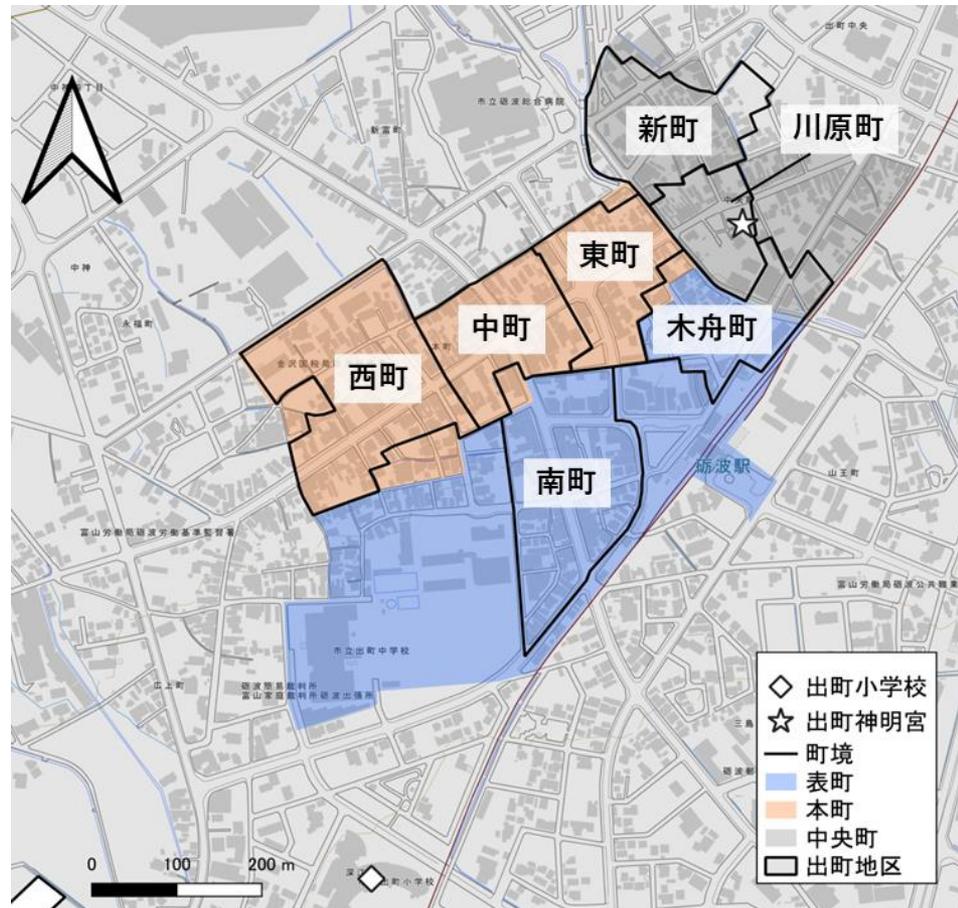


図3 祭礼が行われる地域

(角川日本地名大辞典, 国勢調査, 聞き取り調査により作成).

祭礼の運営組織

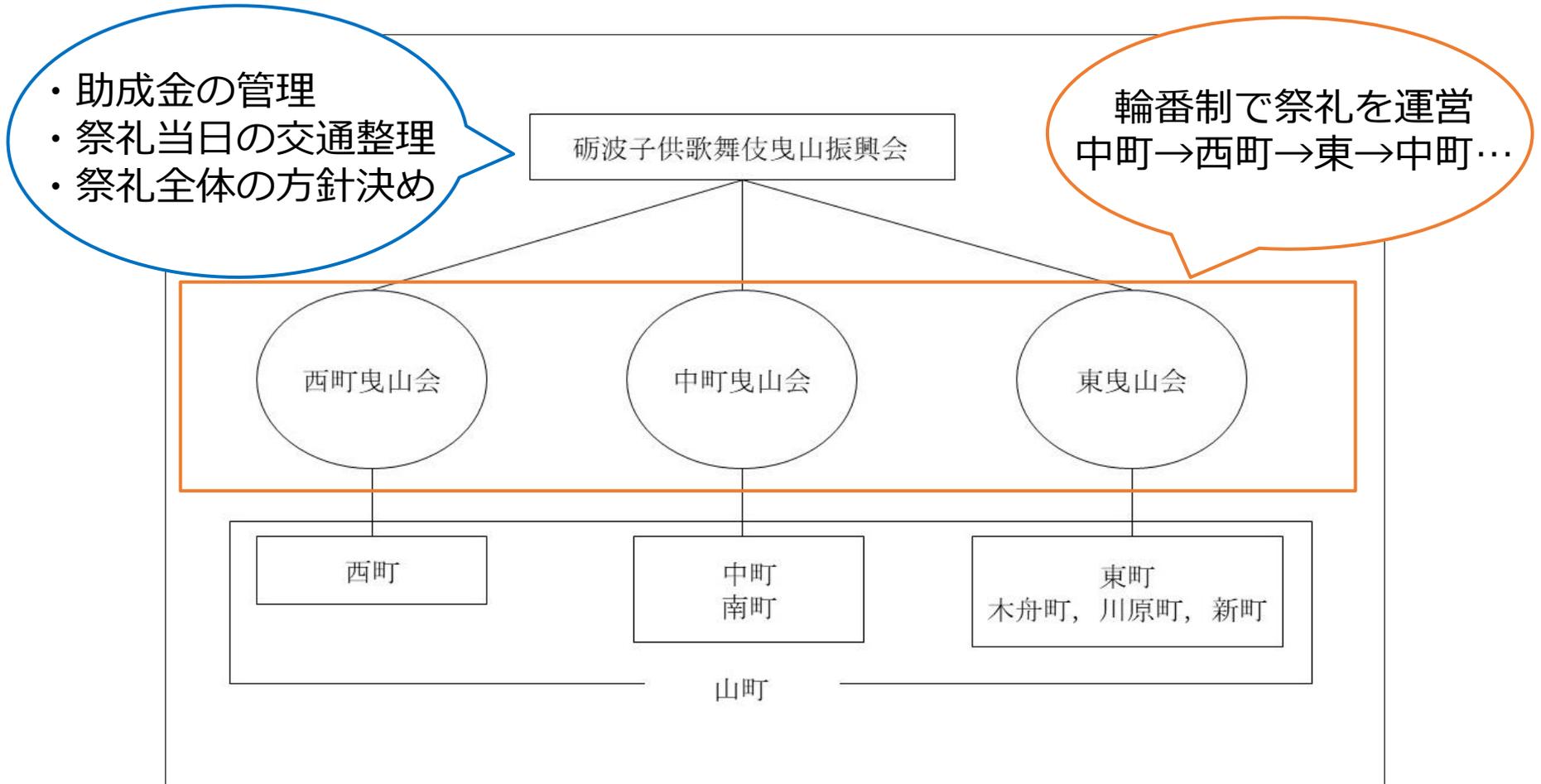


図4 出町子供歌舞伎曳山の組織図
(聞き取り調査により作成).

祭礼の変容

現代の都市祭礼は担い手不足によって変容しているものが多い。

→運営組織や子供役者、曳き手といった

担い手に関する祭礼の変容に着目

出町子供歌舞伎曳山の担い手に関する変化

①当番町制の導入と祭日

②子供役者の選出方法

③曳き手の確保



①当番町制の導入と祭日

当番町制導入の経緯

- ・ 高度経済成長期によって地域住民がサラリーマン化し、**担い手(特に世話方と呼ばれる裏方)が不足**
 - ・ 太夫や三味線、振付師が高齢化
 - ・ 祭礼の費用が嵩むようになる
- 毎年3町が子供歌舞伎を上演することが困難に
→1969年から当番町制が導入

世話方は集まるようになったものの、
3町が歌舞伎を奉納するという伝統は消失
→**祭礼の儀礼的意味の希薄化**

①当番町制の導入と祭日

祭日変更の経緯

- ・本来の祭日は4月16日と17日であったが、集客力を向上するためにチューリップフェア期間中の5月1日と2日に変更(1967年～1979年)
→集客力は向上せず祭日が4月16日、17日に戻る

- ・地域住民が祭礼に参加しやすいように4月29日(昭和の日)と30日に祭日が変更(2009年～)
→祭礼を観光資源化するのではなく、
**担い手が祭礼に参加しやすい環境を整えることで、
祭礼を存続**

祭礼の変容は伝統の解体ではなく、祭礼を維持するために必要なもの
(有末 1983)

②子供役者の選出方法

子供役者の選出難は出町子供歌舞伎曳山最大の課題

山町内で少子化が進行(2010年頃～)

→選出基準を満たす**子供が物理的に不足**

しかし近年は…

山町内の混住化が進み、**祭礼参加に消極的な新住民**が出現

→子供自体は山町(+近隣町)にいるが、

子供役者になりたがらない、やらせたがらない(保護者)

→**子供役者の不足は、少子化だけでなく**

住民の価値観の変化によって深刻化した問題

②子供役者の選出方法

少子化による子供役者の不足

→**選出基準**を緩和して子供を確保



- ・ 当番町内に居住する子供
- +
- ・ 当番町内居住者の外孫
- ・ 当番町内の職場に勤める保護者の子供

→**血縁や地縁を根拠に、**

各曳山会は5～8名の子供役者を選出

表2 子供役者の人数(単位:人)

| 年 | 西町 | 中町 | 東 |
|------|------|----|----|
| 2000 | | | 11 |
| 2001 | | 8 | |
| 2002 | 6 | | |
| 2003 | | | 8 |
| 2004 | | 8 | |
| 2005 | 7 | | |
| 2006 | | | 6 |
| 2007 | | 7 | |
| 2008 | 7 | | |
| 2009 | | | 6 |
| 2010 | | 6 | |
| 2011 | 5 | | |
| 2012 | | | 8 |
| 2013 | | 5 | |
| 2014 | 4 | | |
| 2015 | | | 7 |
| 2016 | | 7 | |
| 2017 | 6 | | |
| 2018 | | | 7 |
| 2019 | | 8 | |
| 2020 | 上演中止 | | |
| 2021 | 上演中止 | | |
| 2022 | | | 7 |
| 2023 | | 7 | |
| 2024 | 6(2) | | |

2020年と2021年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。
2024年の数値は2023年10月時点、括弧内は9月時点で確定していた人数を表す。
(砺波市出町子供歌舞伎曳山会館所蔵資料により作成)。

②子供役者の選出方法

- 昔から山町内に住んでいる家庭は、
子供が小さい時から**祭礼参加を了承**
 - 祭礼になじみのない新住民は、習い事や仕事、
祭礼参加による子供と保護者の負担などを理由に、
祭礼参加に消極的
- 同じ町に住んでいても(=同じ地縁を有する)
祭礼参加は個人によって選択されるように

②子供役者の選出方法

2024年の当番町である西町が子供役者を2名しか確保できないという事態に(2023年9月時点)

→曳山振興会が**出町小学校への公募**を実施

例年は8月までに役者の選出が終了

- 西町内から追加で1名、公募によって3名の子供が集まり、合計6名の子供役者が選出される
- 公募で選出された子供は南町(中町曳山会)に住む姉妹と、選出基準には当てはまらない**山町外に住む子供**
→血縁や地縁といった**選べない縁に基づいた選出ではない**

③ 曳き手の確保

- ・ 曳き手は**当番町の居住者**とその**出身者**が中心
- ・ 当番町制の導入や祭日の変更、協力町の存在などによって曳き手は十分に確保されていた

しかし近年は…

町内の高齢化が進行、出身者が祭礼時に帰省しないなどの理由で一部の曳山会では曳き手が不足

→**祭礼の参加資格を有している(=地縁を持っている)**
にもかかわらず参加しない(できない)地域住民が増加

③ 曳き手の確保

協力町を持たない西町曳山会は曳き手不足に陥り、
日当を支払って近隣町に曳き手を依頼(2017年)

曳き手不足の背景

- ・ 西町内の高齢化が進行
- ・ 若者が町外に出て行ってしまふ
- ・ 郊外で暮らす西町出身の若者が帰省しない
→ **そもそも祭礼に関心がない？**

同じく出町地区で行われる夜高まつりでは、
曳き手として祭礼に参加するために若者が帰省
→ **単に若者の祭り離れが進行しているとは言えない**

③ 曳き手の確保

なぜ夜高に参加して子供歌舞伎に参加しないのか？

- ・ 子供歌舞伎と比較して、夜高まつりは「**単純で楽しい**」
- ・ 夜高まつりと比較して、子供歌舞伎は「**ワンランク下**」
- ・ 「夜高まつりで結束して、曳山もしょうがないから曳く」

→ 神事としての真正性よりも、
イベントとして楽しいかどうか
が参加基準になっている

→ **祭礼の儀礼的意味が希薄化**



↑ となみ夜高まつり 20
引用：富山県観光公式サイト とやま観光ナビ

地域社会における祭礼の意義

祭礼は変容するにしたがって儀礼的な意味が形骸化
→祭礼参加に消極的な地域住民が増加(新住民、出身者)

祭礼参加に消極的な理由

現代社会においては所属するコミュニティが個人によって
選択されるため、氏子地域に基づくコミュニティに
属さずとも社会生活を送ることが可能に

→参加資格(地縁)を有していても祭礼に参加しない

→地縁が選択可能なものに変化、

祭礼の地域コミュニティを形成する役割が希薄化

地域社会における祭礼の意義

対照的に

- ・ 出町小学校への公募によって選出された子供役者
 - ・ 曳き手として雇われる近隣町の住民
- **本来は参加資格を持たない(血縁、地縁を有さない)**
地域住民たちが祭礼に参入
- **選択縁による担い手が祭礼に取り込まれる**

祭礼をはじめとした地域の伝統文化においては
血縁や地縁による運営が限界

- **選択縁による関係性を地域社会に取り込み、
地域文化を守ることが現代の都市祭礼の意義**

おわりに

出町子供歌舞伎曳山の担い手不足は、
少子高齢化や人口流出といった物理的な要因によって
引き起こされ、新住民をはじめとした地域住民の
祭礼への意識の低下によって深刻化

→地域住民の地縁によるコミュニティに帰属する意識が
薄れた結果であり、**都市祭礼の地域コミュニティを
形成する場としての役割は希薄化**

その一方で...

本来祭礼とは本来は縁のない選択縁による参入者が
出現するようになったため、今後は**選択縁による関係性が
地域社会を支えていく**と考えられる

参考文献

- 有末 賢 1983. 都市祭礼の重層的構造—佃・月島の祭祀組織の事例研究—. 社会学評論 33(4): 37-62.
- 上野千鶴子 1984. 祭りと共同体. 井上 俊編『地域文化の社会学』45-78. 世界思想社.
- 卯田卓也・阿部依子 2015. 過疎地域における祭礼の存続形態—佐久市望月地域の榊祭りを事例として—. 地域研究年報 37: 33-59.
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1978. 『角川日本地名大辞典16富山県』. 角川書店.
- 喜多祐真 2018. 子供歌舞伎からみる都市祭礼の変容と地域社会—石川県小松市お旅祭りの事例—. 富山大学人文学部人文地理学研究室卒業論文集(2017年度).
- 佐藤 瞳 2023. 砺波市出町子供歌舞伎曳山における祭礼空間の変容. 人文地理学フィールド演習(2022年度)報告書: 28-36.
- 申 英根 2009. 地域活性化政策による伝統的祭りの変容と地域社会—大韓民国江原道江陵市の「江陵端午祭」を事例として—. 地理科学 64(2): 63-77.
- 平 篤志 1990. 東京都千代田区神田地区における人口減少に伴うコミュニティの変容. 地理学評論 63A(11): 701-721.
- 瀧野利緒 2013. 地方都市における祭礼の継承—富山県魚津市たてもん祭りを事例として—. 富山大学人文学部人文地理学研究室.
- 砺波市五十年史編纂委員会編 2004. 『砺波市五十年史』砺波市.
- 砺波市史編纂委員会編 1993. 『砺波市史資料編3近現代』砺波市.
- 広瀬慎一 1992. 出町子供歌舞伎の演題について. 砺波散村地域研究所研究紀要 9: 86-95.
- 広瀬慎一 2004. 戦後の出町子供歌舞伎曳山のあゆみ. 砺波散村地域研究所研究紀要 21: 65-72.
- 広瀬慎一 2012. 出町子供歌舞伎曳山祭りのあゆみ(戦前まで). 砺波散村地域研究所研究紀要 29(別冊).
- 渡辺康代 1999. 近世城下町における祭礼形態の変容—下野国那須郡烏山を事例として—. 地理学評論72A(7): 423-443.
- 200年祭広報委員会編 1988. 『となみ子供歌舞伎曳山車200年祭』砺波子供歌舞伎曳山振興会.